

# 新教科書の使い方 Q & A

※ここでは、教科書に関するおもな疑問を取り上げました。このほかの疑問にもお答えできるように、現在教師用指導書を鋭意編集集中です。

Q

新学習指導要領では、3年間の学習の見通しを持たせるためのガイダンスが新たに設定されました。ガイダンスでは、教科書をどのように使ったらよいでしょうか。

A

まず、口絵1～2に「家庭分野の学習を、はじめよう！」として、家庭分野の学習の目的や進め方を示しました。さらに、p.4～5には「わたしの成長と、家庭分野の学習」として、小学校のころの学習のふり返りやこれからの目標を考えるページを設けました。口絵3～7では、中学生に身近な年中行事や人生のお祝い事を掲載しました。いままでやこれからの、家族やまわりの人たちとのかかわりを見つめるための資料として活用できます。



▲口絵 家庭分野の学習を、はじめよう！



▲p.4～5 わたしの成長と、家庭分野の学習



▲口絵 年中行事とわたしたちの暮らし  
(折込みの表、裏で構成)

Q

新学習指導要領では、伝統や文化に関する教育の充実をはかることが求められています。この教科書では、伝統や文化についてはどのように扱われていますか？

A

たとえば、口絵3～7では折込みの裏表を使って中学生に身近な年中行事を取り上げています。季節の移り変わりや昔から行われている年中行事と衣（季節や行事に合わせた着用など）・食（行事食、伝統食など）・住（飾り付けや手入れなど）との関わりについて考えるヒントとして活用できます（上記参照）。

さらに、「B 食生活と自立」では、栄養的にバランスのとれた豊かな食生活を築いていけるように、日本の気候風土に適した米を中心に、日本各地で生産される食材をふんだんに盛り込んだ「日本型食生活」の考え方を基本にして、栄養、献立、調理の学習をつなげる工夫をしました。「主食」「主菜」「副菜」「汁物」ごとに展開されている調理実習は、献立や栄養の学習にも活用しやすいつくりとなっています。47都道府県すべての郷土料理例を掲載したり、各地域のうどんやお雑煮の比較写真を掲載するなどして、地域の食材や文化を見つめ直すことができるような工夫も盛り込みました。「C 第1章わたしたちの衣生活」では、ゆかた、柔道着、はんてん、作業衣、はっぴなどの身近な和服を取り上げました。ゆかたについては、部分名称や着方、たたみ方なども示しました。「C 第2章わたしたちの住生活」では、日本の伝統的な住まいの「縁側」「引き戸」などを取り上げて、現代の住まいや生活との関わりについて考えさせる内容を掲載しました。また、発展的学習内容として世界の民族衣装や住宅例、料理例なども掲載し、海外の文化との比較もできるようにしました。



▲伝統的な住まいを取り上げたワーク



▲調理実習は主食、主菜、副菜、汁物ごとに展開



▲身近な和服の例

Q

「生活を豊かにするための工夫」として、布を用いた物の製作が必修となりました。どのようなものを題材とするか悩んでいます。この教科書ではどのように扱っていますか？

A

「生活の豊かさ」は、生徒一人ひとりによって異なります。したがって、みんなが同じ物を製作することが、それぞれの生徒たちの生活の豊かさにつながるかどうかは、疑問が残ります。自分や家族の生活に役立つものや、便利なもの、持っているとうれしくなるようなものを、生徒一人ひとりがそれぞれに考えながら製作することができるように、この教科書では「基本の製作例」と「アレンジ例」を、写真でできるだけ多く掲載しました。

たとえば、製作題材例の「きんちゃく袋」は小学校でもよく製作される題材ですが、この教科書では「まち」をつけて袋に奥行きや厚みを出し、「つくりたい袋」の大きさを自分で考えながら製作できるようにしました。小学校の実習を活かしながら、一歩進んだ立体的な袋をつくることができます。オリジナルのアレンジの参考にしやすいように、生徒が取り組みやすいアレンジ例も豊富に写真で掲載しました。幼児の生活に役立つきんちゃく袋の例（弁当袋、着替え入れなど）も掲載しているので、内容Aの「家族」や「幼児」の学習にもつなぐことができます。また、身の回りの布製品の展開図などの資料も豊富に掲載しているので、教科書に掲載されていないものを製作題材とするときにも参考にすることができます。

モノが豊富な現代、自分が製作したものを使用することは、中学生にとっては「非日常」的なことです。しかし、「ものをつくることの苦勞」「できたときの達成感」「家族に喜んでもらえる満足感」など、実際に製作して体験してみないとわからないことが、確かにあります。家庭分野の目標を生徒一人ひとりに達成してもらうために、先生の願いや想いを込めて、さまざまな物の製作に取り組んでください。限られた時間での製作実習では物足りないと感じる生徒たちには、「課題と実践」につなぐことも考えられるでしょう。



Q

学習指導要領に示された指導内容を満たす授業を、限られた時間の中で行わなければなりません。この分厚い教科書を、どのように活用していけばよいのでしょうか？

A

中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」（平成20年1月17日）において、「繰り返し学習や知識・技能を活用する学習、発展的な学習に自ら取り組み、知識・技能の定着や思考を深めることを促すような工夫が凝らされた、読み応えのある教科書」が重要であると提言されました。このことを踏まえて、後に教科用図書検定調査審議会から「教科書の改善について～教科書の質・量両面での充実と教科書検定手続きの透明化～」(平成20年12月25日)という報告書が発表になり、6つの「教科書改善に当たっての基本的な方向性」が示されました。この中に、「2. 知識・技能の習得、活用、探求に対応するための教科書の質・量両面での格段の充実」という項目があります。これらに基づいて、教育図書の新しい技術・家庭科教科書でも、質・量両面で充実した教科書を目指して編集いたしました。

この報告書の中には、教科書の内容の質・量の充実に当たっては、多くの教員や保護者の間に定着している「教科書に記述されている内容は、すべて教えるものである」という教科書観について、「個々の児童生徒の理解の程度に応じた指導の充実に資する教科書」や「児童生徒の学ぶ意欲の向上に資する教科書」、「児童生徒の自学自習に資する教科書」といった見方に転換されていくことが求められているという記述があります。

「教科書の順番通りに、すべて教えなければ！」と考える必要は、まったくありません。先生の授業計画や生徒の実態に合わせて、順番を入れ替えたり、関連する内容を一緒に扱ったりしながら、必要なときに必要な場所を使用していただければ幸いです。

教科書の使い方は先生次第だね！

